

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4373000423		
法人名	医療法人 新清会		
事業所名	グループホーム むつみ荘		
所在地	熊本県葦北郡芦北町大字佐敷371-6		
自己評価作成日	令和5年1月16日	評価結果市町村受理日	令和5年3月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和5年1月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

新型コロナウイルス感染症が発生し3年になろうとしている。
 又、ウクライナ、ロシアの戦争が毎日々、世界中が暗いニュースばかりでうんざりしていると思います。
 むつみ荘では現実を受け止め時勢を知り、むさぼるな、あらしうな、欲にふけるな、そうしたらおのずと
 しあわせはおとずれる。
 を肝に銘じ、思いやりの心・ゆたかな心・支えあいの心。
 感謝の気持ちを抱負に、利用者様と寄り添って行く事を努めております。
 早く世界平和が訪れる事を願いつつ、希望を持って取り組んでいきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今回の訪問で入居者の豊かな表情に職員の変わらぬ細やかな支援が継続されている場面を見る事が出来た。決
 して使い勝手の良い建造物ではなかったが、一昨年の洪水被害後に1階居室空間の改修が行われている。他は開
 設時と殆ど変わらず2階居間への移動は昇降機はあるが、入居者の希望や機能訓練を兼ねて朝夕、歩行での移
 動が日課である。仏壇には毎日お仏飯が備えられ、入居者の中には手を合わせ「お風呂ありがとうございます
 た!」「ご飯ありがとうございました!」など唱えられている。職員は「目が届く」「心が届く」「手が届く」優しい介護の
 精神をぶれることなく、職員同士も労わりあひながら、法人最初に開設したホームとして誇りをもって日々の業務に
 あたっている。同法人の他のグループホームも同様、当初から地元食材を活かしながら職員による手作り料理が食
 卓に並んでおり、「腹いっぱいであ〜くらた♪(酔っぱらった)」入居者の一言に満足の度合いが伝わってくる。居心
 地の良いホームが今後も変わらず続くことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが ○ 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・目が届く・心が届く・手が届く ・思いやりの心・豊かな心・感謝の気持ち ・支えあいの心 を理念に掲げ実践に繋げている。	長年に渡り地域医療に貢献してきた母体医療機関の思いを受け継ぎ、入居者、家族、地域へ向けた職員の素直な思いをホーム理念としている。大きくわかりやすく書かれた理念は、入居者と職員が日々生活を共にするリビングや階段の踊り場に掲示され空間の一部となっており、振り返りの原点でもある。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍が続いており、なかなか交流は難しい。	二年前の大水害によりホームを取り巻く地域状況も一変し、家屋はあるものの住民の姿はなく、これまで普通に行われていた人々との交流もままならないようである。水害前まで実施していた住民との避難訓練や花植え作業なども中止している。	コロナ終息後の地域行事や避難訓練の際の呼びかけなど再開に向け働きかけに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍により活かせていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の為運営推進会議も資料提出すれば良いとの状況である。 意見、助言等は頂いていない。	推進会議はコロナ禍により通常開催に代わり、資料や広報誌によりホームの現状を伝えている。管理者は会議メンバーである行政や消防署、地域代表者などに資料を直接手渡ししており、消防署の担当者からは訓練要請にはいつでも応じられるとの言葉をもらう等、協力体制が出来ている。	会議資料には入居者の日常の様子を広報誌で伝えている。ヒヤリハットや事故発生時の問題点や対応策について報告しており、身体拘束についてもホームの方針や取組を発信されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍により、話し合いの機会がない状況である。	行政からの認定調査にはリビングで応じ、入居者の現状のありのままを伝えている。防災無線から行政の情報を収集し、運営推進会議の報告書は担当者の顔を見て直接手渡すようにしている。水害後の手続きなども家族に代わりホームで対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施錠は防犯の為行っているが、帰宅願望の強い方に対しては施錠を外し、本人様の思われるがままに一緒に付き添う等の対応を行っている。	日中を2階空間で過ごすことから防犯上玄関を施錠しているが、外出傾向のある方には散歩を兼ね近隣と一緒に歩くなどの対応を取っている。本年度はホームでの身体拘束について研修の機会がなく、オンライン研修に参加して情報を共有している。昼夜を通しセンサーマットは使わず、入居者の状況を察知して早めに駆け付けるようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	コロナ禍により勉強会、研修会などの機会がなく、早く以前のように学びの場を取り戻したい。職員による虐待はない。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	コロナ禍により研修等の参加が困難な状況である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明は十分行っている。変更があった時には書類を作成し、同意書を頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱は設置しているが殆ど活用されていない。気兼ねなく意見、要望など言って頂くよう家庭的な雰囲気に対応している。	ケアカンファレンスは全職員が参加して入居者を見ながら台所で開催し、入居者の現状を共有し必要なケアを提案している。入居者も普段から自由に要望を出されており、カンファレンスの中や申し送りで共有している。職員は家族の意見や要望を確認し、自宅への帰省への要望なども出ている。入居者の現状を伝える際、いい事ばかりでなく、気になる点も伝えるようにしており共に支え合うこととしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ禍で会議は出来ていないが、利用者様各自の状態報告ノートを作り毎月報告している。	職員移動の少ないホームでは、普段から何でも言い合いケア向上に向け一人ひとりが努力している。管理者は入居者のことはもちろんのこと職員の立場を理解し、共に力を出し合うよう心掛けており、それぞれが役割を担い運営を続けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境は十分配慮している。働きやすい場となっている。場の雰囲気を乱さないよう、各スタッフの配慮も必要。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	勉強会、研修棟はコロナ禍により困難な状況。資料等は職員全員閲覧できる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により交流は殆ど出来ていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	まずは本人様の気持ちに共感しながら対応している。また、家族の都合等も有る為出来る限りの配慮で対応するように心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	常に何でも相談して頂ける様な家庭的な雰囲気づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人様、ご家族の要望も伺いながら出来る限りの対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族的な雰囲気を作り出し、お互いに協働しながら和やかな生活が出来る様に働きかけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人、家族の思いを共感し共に支え合い支援出来る様に努めている。コロナ禍で面会禁止とはなっているが、どうしても希望される方にはDrの了解を得て窓越しでの面会を行っている。又、LINEにて写メを送ったりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出等はDrの了解を得て行っている。家族からの要望もあり家に連れて行かれ、近所の方と会ったり、お寺参りされたりも出来ている。今の所家族の協力が必要である。	入居者の1階居室から2階空間への移動がホームの一日のスタートであり、個々の定位置であるソファに腰を下ろし、隣の入居者が眠られると毛布をそっと掛けられるなど馴染みの関係性が築かれている。家族等からの差し入れはリビングに置かれた仏壇に一度備えてから皆で食し、手を合わせて湯舟に入り、上がると仏壇に手を合わせ、感謝の気持ちを表現する方など自宅の延長としての暮らしぶりが窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中は皆さん居間で過ごされ孤立する事はない。利用者様同士おしゃべりされたり、テレビを視聴されたり、自由に動いて居られる。トラブルもあつたりするが、皆さん仲良くされている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院退所となった方も居られるので、様子を見に行ったり、家族の方へもお元気でされているか声を聞くなどの配慮を大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に声かけ話しかけを行い、対応している。また、日々の行動や表情からくみ取り、関わる中で把握している。	先人の知恵を活かし、手作り団子(七夕饅頭、盆饅頭、送り団子など)で四季を感じたり、入居者同士会話を楽しむなど、何気ない日々の中に入居者からの話を聞き取り、支援やプランに反映させ入居者の思いに応えるよう努力している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族また、関係者などから色々な情報を得て把握し、暮らしやすい生活が出来る様に配慮している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりを理解、把握し出来る事はしてもらい、出来ない事はお手伝いするなど、出来る力を発揮出来る様に支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意見、要望を聞き、毎月職員全員参加のケアカンファレンスを行い、見直しを図りながら無理のない介護計画を作成している。	職員を入居者の担当制としており、毎月のケアカンファレンスで入居者の状態を共有して支援内容を評価するとともに医療については状態報告ノートを作成し、担当医からの指示や助言を支援に反映させている。入居直後の初期プランにはメリハリのある生活や他者との関係づくり、意欲の向上を掲げている。できることを手伝ってもらいながら感染症の状況を見て家族とのお寺参りなども実現しており、定期的な評価により見直しを図りながら現状をしっかりと把握する事に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員の気づきや利用者の状態変化は個々の記録に掲載し、申し送りノートにも記載し、情報共有を徹底し計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて通院や送迎等の支援も柔軟に対応し、個々の満足度を高める様にしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍によりなかなか出来ていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に入所の段階で篠原医院がかかりつけ医となる事を家族へも了解済み。他、専門医への受診は家族の希望としている。	本人・家族の了承のもと全員が隣接する法人医療機関をかかりつけ医とし、4か月に1度の健康診断や必要に応じ受診を支援している。職員は入居者の些細な変化や異常を見逃さないよう日々の関わりに努め、気になる事があれば早め早めに主治医への報告や受診に繋げている。夜間対応も可能であることや月2回の訪問看護は、家族の安心や職員にとっても心強いものとなっている。専門医については家族の対応を基本とし、結果を共有しているが困難な場合はホームでも柔軟に対応している。食後は個々に応じた歯磨きや夜間の義歯管理に努め、治療の必要があれば歯科受診を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調や表情の変化を見逃さないよう早期発見に取り組んでいる。変化に気づいた時には直ちに訪看、看護職に報告し適切な医療に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には医療機関に情報を提供し、職員が頻繁に見舞い、家族とも回復状況など、情報交換しながら早期退院支援に結び付けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に伴う意思確認書を作成し、事業所が対応し得る最大のケアについて説明を行っている。看取りについては希望に応じて対応する。これまでに1件の看取り希望があり行っている。	入居の際、重度化に伴う意思確認書を作成し、ホームに出来得る支援について説明を行っている。その後必要に応じて家族と話し合いの機会を持っている。本人・家族の希望があれば最終まで支援する事としているが、家族の負担などもあり、重度化された場合、母体医院での対応を最終的には望まれている。	職員は今後も優しさを大切に、観察力を持ちながら日頃のケアを大切にしていきたいとしている。本人・家族に今後変わらぬ支援に努めていただきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全ての職員が対応できる体制ではあるが、隣が医院なので何かあった時にはすぐに対応できている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	コロナ禍により自主訓練となっているが年2～3階は必ず行っている。	火災を想定した避難訓練を年2回、水害想定訓練を1回実施している。コロナ禍にあり以前のような訓練には至っておらず、自主訓練とし玄関先まで避難を行っている。また、豪雨被害を受けた経験を活かしながら、常に意識を持って取り組んでいる。備蓄は水やカップ麺などの食料をホームで確保し、賞味期限を見ながら入居者に実際食べてもらっている。オムツや口腔ケア品などを今後備品として常時確保しておきたいとしている。	今後もコンセントやホーム周辺、台所などチェック表に沿った安全確認の継続に期待したい。和室の窓には柵がなく危険であることが以前からあがっており、早急な対策が望まれる。避難訓練についてはコロナの状況を見ながら、運営推進会議を活用した訓練も有効と思われる。消防署から受けるアドバイスや情報(天ぶらのあげ粕からの発火の危険など)を家族にも広報誌などで伝えていただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーの確保に努めている。また、本人を傷つけないように、さり気ない言葉かけや対応に配慮している。	一人ひとりの入居者を知り、必要な支援を行うことを職員間で共有している。呼称は反応やこれまでの呼ばれ方などから苗字や下の名前に対応している。現在入居者、職員全員女性であり、同性による介助で支援が進められている。職員は方言を交えながら、安心される優しい介護に努めており、入居者の表情や発せられる言葉からも、その方らしい暮らしであることが窺えた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に合わせて声かけを行い、表情、言動からくみ取っている。さり気なく問いかけたりもしながら、本人様の思いや希望を把握出来る様努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは持っているが、時間を区切った過ごし方はしていない。一人ひとりの体調に配慮し柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人にも伺いながら、スタッフ同士で相談しながらその人らしさを引き出せるよう身だしなみ、おしゃれの支援を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	以前は出来る方には配膳をお願いしたり、後片付けも手伝ってもらっていたが、現在は出来る方が居られない。また、食事介助の必要な方が増えた為食事を一緒に摂る事が困難である。	入居者の最も楽しい食事であり、献立作成から食材購入、調理を開設時から職員が行っている。季節感や好みを取り入れ、調理中の音や匂い、器や盛り付けへの工夫も楽しみを増している。職員が準備した柏の葉を使った柏餅をはじめ、季節の団子づくりなど入居者もできる事で食に関わり、職員も同じものを食べる事で思いを共有しながら次の料理に繋げている。昼食後「おご馳走でえ〜くらた(酔っぱらった)♪」満足度が伝わる言葉であった。	入居者は畳の居間から食堂に移動し、職員の見守りの中、個々のペースで食事を摂られている。職員にとってもホームでの食事は活力になっており、継続した取組に期待したい。また、行事食以外の普段の料理も広報誌などで紹介することでより日常が伝わり家族の安心につながると思われる。取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの体調と、一日の摂取量、水分量もチェック把握している。本人のペースに合わせて支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声かけ、見守りを行い、出来る方は自分できちんと出来ている。出来ない方へは、介助を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作り一人ひとりのパターンを確認し、排尿声かけ、トイレ誘導はまめに行っている。そのため尿取りパットを着けて居られる方も汚染が少ない。	個々の排泄パターン表を活用しながら声掛け・誘導、自立の方の継続に努めている。現在、布パンツを使用される方が1名と、他はリハビリパンツのみやパットを併用されている。排泄後は温タオルで皮膚を拭き上げ、清潔保持に努めるなど細やかな支援である。トイレは2階に2か所、居室のある1階は1か所のため混む場合は、共有のポータブルトイレを置くなど工夫している。トイレは清潔を心掛け使用後の確認も徹底し、使用しない1階のトイレも日中の掃除が継続されている。	トイレ内にも季節の小花を飾るなど職員の配慮が窺え、今後も入居者が気持ちよく使用できるよう変わらぬ取組に期待したい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給には十分気をつけ、なるべく繊維質の多い食材を取り入れ身体を動かす事を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの気持ち、習慣に合わせた入浴支援ではないが、声かけを行い、個々に合わせた入浴支援を行っている。	決して広くはない一般の家庭浴室であるが、入居者の希望や身体状況に応じ、午前・午後の入浴を支援している。入る前や入浴中、あがった後など職員は声掛けを一番大切にしている。入居者も入浴を楽しみにされており、少なくとも週3回、多い方は毎日入られている。季節湯支援も継続しており、菖蒲は購入にしているが、柚子は職員が持ち寄り香りを楽しみながら入ってもらっている。入浴後は水分補給をはじめ、保湿にも十分配慮している。	お風呂から上がり居間に戻った方が仏壇に手を合わせおりんを鳴らし、「お風呂さんありがとう！」との声が聞かれた。入浴が気持ち良かったことやホームの日常が伝わってくる。開設時から変わらぬ支援が入居者の楽しみの一つとして継続されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご高齢でもありソファーに座りテレビ視聴されたり居眠りされたりが多い。昼夜逆転にならないように声かけを行い覚醒を促している。起床、朝食時間もほぼ同じ時刻となって居り、生活のリズムはきちんと出来ている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬ファイルを作成し、一人ひとりの薬をケースに整理し把握に努めている。また、服薬時は日付、朝食後、昼食後、夕食後、名前の確認を行い誤薬がない様に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみは皆さん意欲を出しておられる。一斉に取り掛かりあつという間に終わってしまう。とても助かっています。ラジオ体操も毎日一生懸命頑張っておられます。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	重度化に伴い全員とはいかないが心身の活性化につながるよう本人の希望に応じて散歩に出かけたりしている。また、家族の協力を得て外出なども出来ている。しかし、未だにコロナ禍であり、想う様にはいかない状態である。	母体医院への受診や個々の希望等に応じ散歩に出かけたり、玄関先で駅伝の応援に参加している。また、初詣や地域へのドライブ(めしま)に出た際、久しぶりの外出でもあり「芦北は広かな〜！」と、喜びを口にされたようである。コロナ禍にあるが家族の協力により、年末年始の帰省をされた入居者もおられる。	川沿いの桜並木をはじめ、季節の外出を身近に楽しめる環境である。感染症の早い終息が待たれる。また入居年数の新しい家族には、家族の協力や本人の希望を伝えたり、以前の例を挙げておくなど、アドバイスも良いと思われる。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が困難な方ばかりであり家族の了解を得て職員が管理をしている。自分のバッグは、財布は、と訴えて来られる方も居られ、その都度預かっていることを伝え安心感に努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	主に電話の取次ぎを行って、電話での対応が出来る方は大いに支援している。オンライン面会も可能である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間と台所はつながっており、生活感あふれ、五感を刺激している。居間には畳にソファを置き心地良く過ごせるようにしている。また、花や飾りなどで季節感を出している。	玄関先には色とりどりの花を植えたプランターが迎えてくれ、ホーム内にも水仙やろっばいをはじめ季節の花が飾られている。日中は食堂と畳の間が続く2階での生活が中心であり、決してゆとりのある空間ではないが、職員は常に目配り、気配り、声掛けを怠らず、入居者が居心地よく過ごせるよう取り組んでいる。感染症への対応から掃除をはじめ、定期的な換気も徹底し、「寒かけどー時我慢して下さいね〜！」の職員の声に「うんうん！わかつとる！」いつものやり取りにホームの温かな日常が伝わってくる。1階の玄関ホールには、ソファやテレビが置かれ、まだ就寝したくない入居者がテレビを見たり、椅子を増やし多人数で寛げる様にするなどその時々で細やかに対応している。	日中は2階のソファでゆっくり過ごされ、席も入居者自身が相性などから決定されており、職員は必要時に誘導を行っている。ソファの高さについては少し低く立ち上がりが困難であり、その旨を代表者にも報告している。安全面からも早急な対応が待たれる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関ホールには、ソファを設置し思い思い安全に過ごせるようにしている。その時その時で椅子を増やしたり皆さんが落ち着ける居場所である様に配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	備え付けのダンスとベッドがあり、特に持ち込みはない。好きなようにして頂いている。	2年前の豪雨被害後に改修が行われているが、広さや襖の戸など雰囲気は変わることなく、入居者も不安なく新たな居室の生活に馴染まれている。入居時に自宅にあるものは何でも持参してよいことを伝えているが、改修の際性能の良いベッドやチェストが備わり必要な衣類が中心に持ち込まれている。日中の生活は2階が中心であり、1階居室に降りて午睡や休憩をされる方は殆どおられないが、居室に戻った時安心できる様、上げた布団や毛布を折重ね、枕を最上に置くというスタイルは変わらぬ取り組みである。	広さや採光など十分な居室ではないが、昔ながらの良さを残しながら、職員は日々の掃除や換気、歩行の妨げにならない空間などを職員間で作り上げ、継続して取り組んでいる。布団の整頓をはじめ日々の取組を広報紙などでホーム内の一コマとして伝えることで面会を控えている家族の安心につながると思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせ昇降機の使用を行っている。一人ひとりの理解力を見極め、必要な目印を付けたら、物の配置に配慮している。		